

## 審査結果の要旨

論文提出者氏名 ケッサクン・ルタイワン

ルタイワン・ケッサクン氏の博士論文The Semantic structure of Motion Expressions in Thai (タイ語の移動表現の意味構造をめぐって)はタイ語における移動表現、とりわけ動詞連続によって表される事象に注目し、日本語および英語との対照研究を行ったものである。これまで提案されてきた、Talmyによるverb-framed対satellite-framedという類型化に対し、タイ語のデータからより精緻な類型を提案し、かつ談話レベルでの表現様式についてもこの類型を拡張した功績は大である。論文は全6章から構成されている。

第1章では、移動動詞の先行研究をサーヴェイし、Talmyの理論的枠組みを紹介し、その後タイ語の動詞連続の構造、および各スロットの動詞がもつ意味タイプについて一般的なスキーマを提示している。第2章では、タイ語の移動動詞について様態、経路、方向、ダイクシスという枠組みにしたがって分類を行っている。日英語において対比しうる表現もあげ、各言語の語彙構造における分布の相違にも言及している。また、動詞連続の基本スキーマからの拡張を、一部要素の細密化としてのmagnificationとスキーマの部分的な繰り返しとしてのrecursionに分けて分析している。第3章では、タイ語では移動事象のタイプごとに、verb-framedとsatellite-framed的な表現方法に分岐するという特徴が示される。移動が自然発生的であるか、能動的であるか、他動的・使役的であるかによって、事象の中核スキーマである経路をサポートする事象成分の表現が義務的かどうか分かる。第4章では、移動事象の言語ごとの表現の違いを、小説の翻訳(パラレルコーパス)を使って分析している。前章で作例を通して見た言語ごと、事象ごとの表現方法の選好は、談話データにおいても見られることが確認された。第5章では、本論文で明らかになったタイ語、日本語、英語の諸特徴を要約している。

本論文は、以下の諸点において、タイ語の移動表現の意味構造の理解、および移動事象の言語化の類型論的研究に貢献していると判断される。

1. 記述的成果。これまで英語や日本語などの良く知られた言語については、移動表現についての包括的な記述・分類が見られた。しかし、タイ語についてはそのような成果はほとんど見られず、本論文、とりわけ第2-3章における、認知意味論の枠組みにそった記述的成果は、今後のこの方面研究の新たな出発点となると思われる。審査においては、タイ語の移動表現に対応するものとして挙げられた日本語や英語の表現について、対応の適切性について疑義が呈されることもあったが、第2章で挙げたタイ語の移動表現の分類そのものは一貫した基準にもとづいた合理的なものであり、この点において論文本来の趣意は果た

されているものと判断する。また、タイ語は語彙構造のみを大づかみに見れば satellite-framedタイプと見なしうるが、同じタイプに属するとされる英語との比較において、擬態語の語彙構造における位置づけなど、興味深い相違を明らかにしたという点も評価してよい。

2. 理論的成果 (a)。従来のTalmyの類型化において、タイ語や中国語などの動詞連続をもった言語は、多くの面で問題となってきた。一つには、これらの言語の移動表現では確かに様態+経路という組み合わせが広く見られるのだが、その場合「経路」にあたる語が元来の意味でのsatelliteにあたるかどうかという点が問題となる。孤立型言語においては、屈折がないため形態論的な判定基準がうまくはたらかない。また、経路を表す語は単独で述語として使用されることもある。こうした実態をふまえ、厳密なverb-framedでも satellite-framedでもない、第3のタイプとしてequipollentタイプを唱える研究も近年は見られる。本論文はこれに対しタイ語のデータを元に、経路にあたる表現が動詞であるか否かということは、語単独で答えるべき問題ではなく、動詞連続のスキーマにおける位置によって判定すべきであるという立場を打ち出し、論証している。その理論的前提として、先行研究において提案された動詞連続の構造を批判的に検討し、より一般的な構造を設定したという点は高く評価される。このような理論的操作に基づき、スキーマ内の位置によってverb-framedとsatellite-framedの双方の属性をもちうる言語としてタイ語を特徴づけたことは重要な貢献である。

3. 理論的成果 (b)。第3のタイプとしてのタイ語は、意味構造によって従来提案されてきた2つの基本形のどちらかに近づく。この点は先行研究においては見られない指摘であり、表現タイプのバリエーションが一定の条件によって制約されていることを多くのデータによって論証した功績は大であると考えられる。審査においては、統語的なテストの詰めが一部で物足りないという指摘もあったが、これは英語などとは特性の異なる言語を対象とするさいには不可避の課題であり、この点を考慮すれば本論文での主張は十分にサポートされていると判断した。また、第3章の後半で示される、構文の拡張についての考察も広い応用可能性をもったものであり、他の言語の研究においても示唆するところが大きい。

これに加え、第4章で示された談話データの対照分析は、より強固な実証的論拠を上記の点に与えるものとして高く評価される。本論文では表現パターン別の分類や頻度のカウントといった基礎データの分析が中心であったが、第5章でその可能性を示唆しているように、談話構成のストラテジーまで踏み込んだ分析は今後の実りある研究方向として期待される。本論文はそのためのきわめて健全な土台となると評価する。

以上、本論文は移動事象の言語化という認知意味論における重要課題にタイ語を軸にすえて取り組み、従来なされなかった貴重な観察、分析、理論化を提示したものである。全

体として学術的価値が高く、この分野における優れた研究成果として高く評価すべきものと判定する。よって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。